写真に添えて

宮本百合子

青空文庫

これは、長さ一寸余、たけ一寸ばかりの小さい素人写真です。焼付も素人がしたものと見え、三十年後の今日でもこの写真の隅に、焼付をしたひとの指紋のあとがはっきり見えます。やっと小学校に入ったぐらいの年であった私あてにかかれた次のような文句が裏にあります。

「コレモ　ユリコサン　ニアケマス　オトウサマカ　ナニヲシテ　イマスカ　オカアサマニ　オキキナサイ　オカシイデショウ

〇六・三・二六」

ロンドンから母宛に来た手紙の中に封じこめられたものであったのでしょう。コレモ、とあるのだから、きっと何かほかにも私にくれたものがあったのでしょうが、それが何であったか思い出せず、残念に思われます。

父が、美術に対してどのような鑑識をもっていたかということは、私に明瞭には答えられません。ときには文学の仕事をやっている娘とはちがった趣味を父が持っていることを感じ、建築家は、家とくっつけて絵でも見るから、そうなのかしら、と思うことも少くありませんでした。例えば、父はずっと昔から、いずれかというと、装飾的な要素のかった、色彩的な絵をこのみました。ブランギィンがヴェニスの景色をごく色彩的な効果で描いたのをもっていて、それなど愛しておりました。

家庭で、子供たちの美術的な教養を高めるような努力というものを特別にはしませんでした

が、何かの折にふれ、若い時分の思い出として、高等学校時代にこの祥瑞（ションズイ）を買ったんだよ、なかなか俺も馬鹿にしたもんじゃなかろう、と笑いながら、柱にかかっている一輪差しを眺めていたことがあり、また、今も古ぼけてよごれながら客間の出窓に飾られている石膏のアポロとヴィナスの胸像も、やっぱり高等学校時代の買物で、これを貧乏書生が苦心して買って家へもって帰って来たら、八十何歳かの祖母が、そんな目玉もない真白な化物はうちさいれられねえごんだと国言葉で憤慨し、それを説得するに大骨を折ったと話したりしたこともありました。

金があったらば、父も少しはよい絵を買いましたでしょう。自分ではそれが出来ず、仏蘭西展などがあったとき、私を呼んで二人でカタログなどをひろげ、買うならこれが欲しいなどと話し、実際にそれを買うということは出来ませんようでした。

陶器の趣味についても同様でした。やっぱり逸物を手に入れるには金がいる。そこまでは手が届かぬ。それで晩年は見物だけでした。亡くなる前の年の秋ごろでしたか壁懸（タペストリイ）の展覧即売会がありました。その中で、優れたものを当時建築が完成しかけていた某邸の広間用として是非おとりになるようにするのだといって、自分の手で建てられた家のそれぞれの場所に、自分の気にも入った世界的レベルの絵画、工芸品の飾られるのを見て、深いよろこびと満足とを感じている様子でした。そういう時の、父の老いたが若々しい光のある顔は、美術品に対する無私な情愛というようなものに溢れており、娘の私の心をうごかしたものでした。

没する数年前、久しぶりでロンドンへ再遊しましたが、そのときの旅行の目的は父自身の愉

しみが主眼ではなかったので、大して好きな骨董店まわりも出来なかったようでした。只、三十年前に指環、カフス・ボタンのような小物を買った店が、現在でも同様趣味のある小物を売っているので、懐しがっておりました。私に、折角ロンドンにいるのだから大英博物館だけは毎日でも行って見て置けと頻りにすすめました。特にギリシア室を見ろとも云い、美術的教養があるのでもない私も、或る親しさをもって見物しましたが、それには、また一つの思い出があったからでした。私が女学校の二年か三年で、英語のすこし長い文章がよめるようになった時、不敵にも教科書の英語でない、何かなかみも面白い英語の本がよみたくなりました。父のところには、とにかくそういう英語で、しかも絵入りのがあるので、何か欲しいとせがんだら一冊の紫紺色表紙の本を貸してくれました。「古代ギリシア彫刻家」という題で、父が云うには、これはためになる本だし、絵もあり、活字もパラリとしていて、書いたのは女の人だからお読みということです。

私は奮起して字引と首引き、帳面に自分でわかったと思う翻訳をしてゆくのですが、女学校ではピータア大帝が船大工の習業をしたというような話をよんでいるのですから、どうもデルフィの神殿だとか、破風だとか、柱頭（キャピタル）、フィディアス等々を克服するのは容易のわざでありません。女神の衣の襞がアテネの岸を洗う波とどうなったのか、至極混雑して、やがては従兄の援軍で、どうにか三分の二までやり、遂そのまま降参したことがあります。

父も父だと云ってしまえばそれきりのようですけれども、私にとっては楽しい記憶の一つと

してのこっております。

パリにいた或る日、父は私をつれてどこであったか裏町の骨董店歩きをして、私にいろんな家具のスタイルだとかを話してくれたことがありました。ある店で、柿右衛門を模倣した小さい白粉壺が見つかり、父が、しきりに外国で日本の作品が模倣されている面白さを云うので、では二人で歩いた記念にこれを買いましょうと、私がおそらく生涯に一度の骨董的買いものをしたこともあります。

父が最後の二三年、楽天氏のアトリエで漫画を折々描いていたということを、ふと楽天氏が洩らされたことがありました。シャツだけになって、大した元気で一時間ばかり描いて行かれますよ、というお話でしたが、父はそのことについては何も云わず、作品というものも従って私共は見ておりません。どうせお手習いでしたろうが、私は、ああいう気質の父がどんな漫画をかいたのであろうか、と大変興味があります。紙屑でも、北沢さんがもしまだお捨てになっていないのならいただきたいと考えております。伊東忠太氏が漫画をかかれます。練達とともに非常に或るテムペラメントの現れたものをかかれます。父が漫画めいたものを描いたとしたら、果してどんな線や色で、自身のあの政治的でない気質、淡白さ、ある子供っぽさのようなものを表現したでしょう。どのような題材を、どのようにとらえ、解釈したのでしたろう。まことに知りたいと思います。

夏目漱石さんがロンドンにおられたのは、父よりも二三年前のことのようですが、その時分

書かれたものをよむと、ロンドンの街で自転車の稽古をしたことが記されています。家の近所のダラダラ坂に人通りの少いのを見はからって、颯っと乗り出したはよいが、進むにつれて速度が加って、どうにも始末がつかなくなり、あわやという間に交通巡査に抱きついてしまった。六尺ゆたかなロンドンの巡査はニヤニヤしながら、悠々とした顔つきで大分骨が折れますね、と云った。というような意味の文章です。

父のいた時分、やはり自転車流行の頃であったと見え、父も稽古をしてはよくひっくりかえったらしい様子です。子供のことで、お父様の自転車というと、すぐ、亀の尾をぶったのよ、とあとつけ、よく笑ったものでした。それほどはっきりした印象としてのこったのは、下村観山氏が漫画をかいてロンドンから送って下すったからでした。いくつかコマのある続き絵で、その当時の流行で髭を長く尖らした若い父が気取って山高帽をかぶり自転車のペダルをふんでいる。むこうから女のひとが犬をつれてやって来た。それをよけようと四苦八苦してバランスをとりそこねている父。遂にころげ落ちた父が、哀れややっと起き直って前方を眺めると、自転車ばかりが非人情にも主人をのこして遙か彼方へ進行している。そういう絵がペンとインクで描いてありました。

子供たち私共は、その絵ハガキが大好きで父がかえって後も度々出しては見たものですが、母は、ほんとにいやだ、とか、あぶないのに、とか云ってそうよろこびませんでした。今になって考えれば、三人の子供を育てながら、経済的苦労を辛棒しつつ五年の間留守をしていた母

の心持は複雑であって、山高帽をフッとばして自転車から落ちたりもしているロンドンでの父の暮しぶりに対し、単純な笑いを爆発させることは出来なかったのでしょう。父の気分も、母の心持も、味い深く感じられます。

〔一九三七年一月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集　第十七巻」新日本出版社
　1981（昭和56）年3月20日初版発行
　1986（昭和61）年3月20日第4刷発行
底本の親本：「宮本百合子全集　第十五巻」河出書房
　1953（昭和28）年1月発行
初出：「中條精一郎」（追悼録）、国民美術協会
　1937（昭和12）年1月発行
入力：柴田卓治
校正：磐余彦
2003年9月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

写真に添えて

宮本百合子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/